

イケフェス大阪二〇一八参加記

兎島大輔

生きた建築ミュージアム フェスティバル大阪は大阪の魅力的な建築を一齐に公開する日本最大級の建築イベントである。二〇一五年に始まったこのイベントは毎年秋の週末に開催され、「イケフェス大阪」の愛称とともに市民に親しまれている。今回、当館ははじめてこのイベントに参加した。ここにその経緯と当日の記録を留めておくこととしたい。

実は昨年度、主催者事務局の大阪市都市整備局よりイケフェスへの参加要請を受けていた。その際に打ち合わせを兼ねて館内を案内したところ、当館の建物には思いもかけない魅力が存在するらしいことに改めて気づかされた。実際に美術館を活用する立場から聞こえてくるのはむしろ、設備の老朽化をはじめとする美術館に対する恨み節であった。ところが、そうした不都合な部分も含めて、貴重な遺構であることが再認識されたのである。

しかしながら、イケフェスが開催される秋は特別展シーズンで多くの観覧者もあり、土・日に建築の見学だけを目的とするゲストを迎え入れる余裕がなく、対応しかねていた。ところが、イケフェス開催前後にプレ・イベントやアフター・イベントを催す建物もあると聞き及び、当館でも休館の月曜日ならば対応可能ではないかとの判断に至った。

そこで、建物の魅力を発信することを目的として、休館日の美術

館を楽しんでいただくべく館内ツアーを企画することとした。ただし、原則として作品展示中の展示室ならびに収蔵庫、および執務中の事務室へは立ち入らないことを取り決め、法定の点検など休館日の作業の妨げにならないことを条件とすることを館内で確認した。見学コースは特別室や休室中の展示室、閉店したレストランや現在は使用していない非常用階段など、普段は公開していない箇所を中心に設定した。いずれも昨年度指摘を受けて魅力を再発見したことが、今回のコース決定

に大きく影響を及ぼしている。

当館での館内ツアーは二〇一八年一〇月二十九日月曜日、休館日の午前・午後二回にわたっておこなわれた。反響は想像以上で、応募は各回三〇名の定員を越えたため、抽選によらなければならなかった。



図 ツアー風景

ツアーは二回とも同内容で、集合・受付後に南館中央の第十四展示室（大展覽会室）においてスライドショーを伴う簡単なレクチャーをおこない、次いで館内見学へとうつった。まずはレクチャーをおこなった第十四展示室。天井のガラスは現在封鎖しているものの、当初は自然光が降りそぐ展示空間であったこと、戦後の連合国軍接收時にはバスケットボール専用コートとなっていたこと、北館中央の彫刻室は接收時にバスケット、バレーボール、ボクシング場として使用されたらしいことなど、館の歴史が凝縮された空間であることを体感していただいた。

中央ホールで現在最も目を引く二基の大型シャンデリアは昭和の大改修時の産物で、この時に壁面や柱等の化粧を各地産出の大理石としている。大階段をのぼって二階へ上がり、現在特別室と呼ぶ旧貴賓室へ。ここのテラスから植治・七代目小川治兵衛作庭の名園・慶澤園を俯瞰し、住友男爵本邸跡地の名残を体感するとともに、そびえるあべのハルカスを仰ぎ見る。巨大な泉州瓦やトラバーチン製の窓枠もここから間近に観察できる。

次に休室中の南二階展示室を第一五室から第十八室へ抜け、何も置かない展示室と空の壁面展示ケースとをご覧いただいた。南二階は改装がなされ、かつてのトップサイドライト採光の面影をしのぶことはできない。ステンドグラス下の休憩スペースはかつて喫茶室として営業していた空間で、カウンター上部の緩やかなアールを描く壁面が特徴的である。二階の回廊を一周し、創建当初の意匠であるイスラム風のアーチとともにシャンデリアを間近に見学し、東側の貨物用エレベーターで作品搬出入の雰囲気体験していただいた。

一階美術ホールは昭和五十一年（一九七六）の改修によって生まれたもので、近未来を思わせるデザインが館内では異彩を放つ。ミッドセンチュリー風の椅子も当時のままである。非常階段から地下へ降り、惜しまれながらも閉店したレストラン（ろうじゅ）榴樹跡地へ。開館当初のレトロな雰囲気そのまま残る貴重な空間でもある。そしてリノリウムを用いた廊下を通じて美術研究所へ。館員は毎日歩いているので何とも思わないが、リノリウムの床材はいまでは貴重らしい。美術研究所では扉や木製窓枠などに、かつての学校建築に通有のことなく懐かしい雰囲気が漂う。

通用口から館外へ出て、館の南側面の意匠と黒田門を見学（）。さらに美術館外観を見学しながら正面へまわり、ファサードを堪能。西の大階段から動物園を見下ろし、上町台地の上に立つことを実感してもらい、最後に旧住友家土蔵を見学し、この土地の意味を再確認して解散とした。

いずれのスポットでも多くの参加者が盛んにシャッターを切っていたのが印象的であった。館内では休館日ならではのメンテナンス業務がおこなわれていたが、さしたる混乱も事故もなくツアーを終えることができたのは、熱心な建築ファンのマナーの良さのおかげである。今後も一人でも多くの方に美術館に興味を持っていただけるよう、登録有形文化財である建物の魅力を発信することを心掛けたい。

貴重な機会を与えられた大阪市都市整備局神原真帆氏ならびにベント開催に際して協力を惜しまれなかった関係者各位に対して、末筆ながら深甚の謝意を表したい。